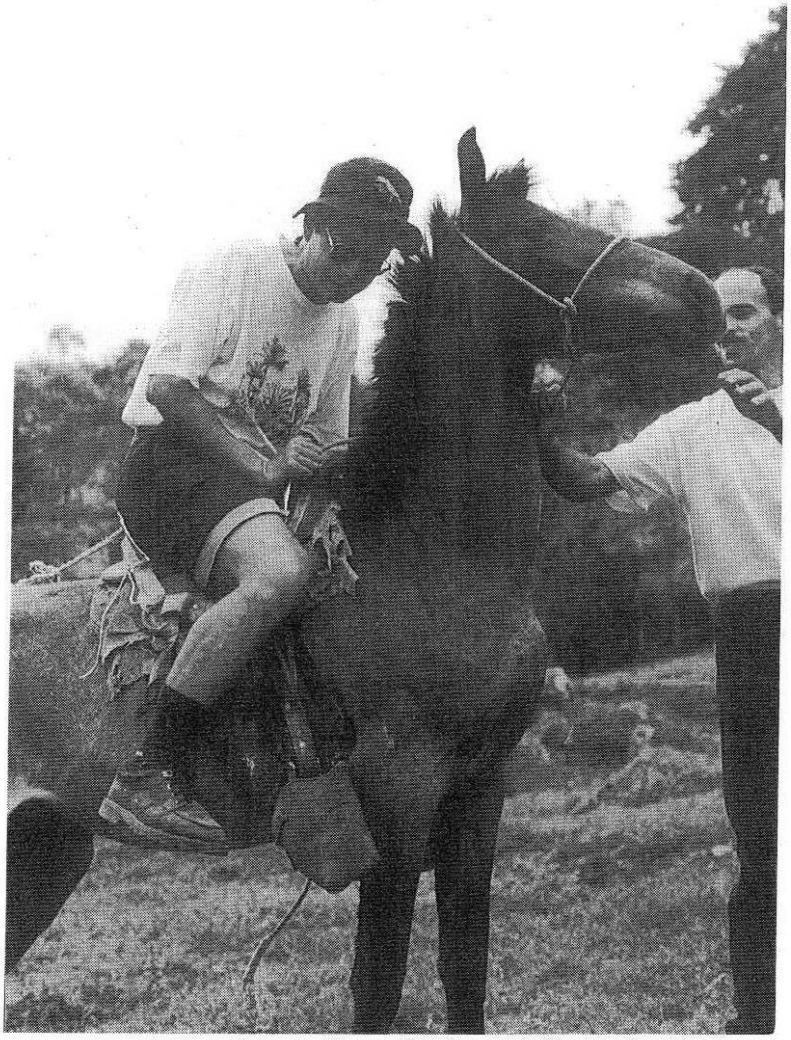
第二の故郷コスタリカ

摂津24職場
西山英治

みなさん、コスタリカという国をご存じでしょうか？中米にある小さな国です。私はその国で、海外青年協力隊員として二年間活動しました。仕事は柱上変圧器の修理に関する技術協力でした。ここでは仕事の内容よりも、コスタリカで暮らした二年間で、特に印象に残っていることについてお話ししようと思います。



さっそうと馬にまたがる西山さん

コスタリカ人は雨を気にしない

地理的には、タイ国のバンコクよりも少し南の北緯十度くらいに位置していて、パナマのすぐ隣にあります。太陽がいつもギラギラ輝く常夏の国ですが、一年のうち七カ月間は雨季なので、雨季には太陽が恋しくなります。また、ほとんど毎日、スコールのようなどしゃ降りが午後にやってきます。強烈な雨はたいてい一時間以内に止んでしまうので、その間は雨宿りをしていればいいのですが、突然やってくるので、よくずぶ濡れになりました。しかし、現地の彼らは雨に濡れることをあまり気にしません。気にしていては、七カ月間の雨季と付き合えないのかもしれません。ところで、私はいわゆる工業高校の同じ敷地内にある職場で働いていましたから、学生達がどしゃ降りの雨の中、平気でサッカーの練習をしていたのをよく見ました。また、女子学生がずぶ濡れになっているのもよく見ました。ずぶ濡れになっている女子学生は、何となく色っぽく見えたものでした。

最初の苦労は言葉の壁

私が住んでいたのは、サンイシドロ　ヘネラルというコスタリカ南部の町で

した。その町の人口は約四万人で、日本人が住んだのは私が初めてだろうということでした。最初に苦労したことといえばやはり言葉です。スペイン語を日本で三カ月間学習していたとはいっても、彼らの話していることがよく聞き取れませんでした。

私は、三食付の下宿生活をしていましたが、一カ月もたたないある日曜日の朝早く、下宿先の一家が外出しようとしていました。おばさんが私に何かいって出かけようとしますが、いつもの早口なので何をいっているのかわかりません。すると、中学生の女の子ビビアナが間に入って通訳してくれました。つまり、「昼までには帰ってきて、昼飯を作ってあげるから心配しなくてもいいよ！」ということでした。ビビアナもスペイン語しかはなせませんが、おばさんがしゃべるスペイン語を私が理解できるスペイン語に直してくれて、さらには、私のしゃべるスペイン語を、おばさんがわかるように伝えてくれたということでした。誰か一人でも親切にしてくれる人がいたら何とか暮らせるものです。

日本からやってきた娘さんと、女子高生に囲まれ、やや緊張ぎみ？

親切なおばさんに感謝感激

親切にしてもらったことで思い出しましたが、こんな事がありました。一年くらいたってから自転車を買いました。休日にサイクリングをするためです。だいぶ地理にもなれて、少し遠出をしたときのことです。

サンイシドロヘネラルから約五十キロ離れたプエノスアイレス（パイナップル畑のある町）まで行った帰り道でした。雨が降ってきて、夕方になり太陽も沈んでしまい、家まで残り十キロくらいのところで、ライトのない自転車ではもうこれ以上進めないということになってしまいました。

タクシーに乗って帰るか、それとも事情を説明して民家に泊めてもらうしかありません。そこで、まずタクシーを呼ぶことにしました。以前ジュースを買った売店に電話のあることを思い出して、なんとか売店までたどり着きました。幸い、まだ売店は開いていました。自分でタクシーを呼んでもよかったのですが、そんな元気も残っていませんでした。その店のおばさんに手短に事情を説明して、自転車を積めるタクシーを呼んでくれというのがやっとでした。するとそのおばさんは、わかったと二つ返事ですぐに電話をかけてくれました。その会話を要約すると

おばさん「タクシーを一台お願いします。自転車も積めるタクシーをね！」

タクシー会社「いったいどうしたんです？誰がタクシーに乗るんですか？自転車も積むんですか？」

おばさん「外人さんが乗るんですよ。言葉が上手に話せないから、私が代わりに電話してるんです。」

タクシー会社「わかりました。あなたの名前と場所をいって下さい。すぐ行きます」

そして、おばさんが私に「もうすぐ来るからね！」

私「ムチャスグラシアス！（ありがとうございました。）」

そのおばさんのてきぱきとした対応に感動してしまいました。

あたりはもうまっ暗になっていて、雨に濡れた変な外人（私のこと）がどこからともなくやって来て、タクシーを呼んでくれという、迷惑なことです。しかし、文句をいうわけでもなく、説教をするのでもなく、こちらの事情をすべて察知してすぐに行動に移してくれました。感謝感激でした。二年間を通じて学んだことがあるとすれば、人間の本質的なところというか、本当に大切なところは何かということではないかと思っています。

本当に大切なことを身をもって教えられた

彼らと付き合っていて、普段はどちらかといえばいい加減なやつやなとか、ずぼらなやつやなとか思っていた人でも、ここというときは「う～んひと味違うやつやな！」と感心させられたときがありました。

働きだして一年くらいたったある日の事、職場の同僚がお金を貸してくれ

といって来ました。

以前から、彼らにお金を貸したら絶対に返ってこないから気をつけろと言い聞かされていました。しかし、給料が先送りされていて、彼が困っていることを知っていたし、彼ならば大丈夫と思い、日本円にして約一万五千円（彼らの月収の半分）を渡しました。

そして、半月後の給料が出た日、現金を受け取ったその場で（しかもみんなが見ている目の前で）お金を返してくれました。彼の心境が理解できますか?みんなの見ている前で私に現金を渡すということは、私に借金していたことがわかってしまいます。私に借金するということでプライドが傷ついているはずなのに、すぐその場で返すということを優先した彼に、二重に感動してしまいました。

この他にもいろんな事がありました。そして、本当に大切なことは何かということを身をもって教えられた思いでした。帰国して半年以上たった今も、友人の何人かは、手紙やE-Mail を送ってきてくれます。

ここで紹介したことは、私の体験したことのほんの一部分です。コスタリカの二年間は、日本での暮らしの十年以上に値する程内容の濃いものでした。近い将来、機会があれば是非またコスタリカに行こうと思っています。

現地の「ミルクイチゴ」の味は格別

休日に友人とバナナの産地へお出かけ